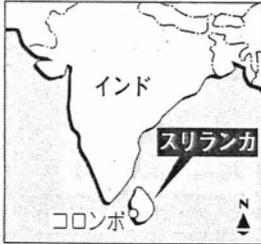


ピープルの地平へ

世界の市場化に抗して

3

文化



インド
スリランカ
コロンボ



協議に任せられる。支店からグループへの融資額は初めは一人当たり百五十ドルだが、メンバーが経験と実績を重ねると十倍以上も可能だ。利子は原則として月4%。高いように見えるが、もし女性銀行がなければ高利貸に頼るほかはない。その利子は月20%だ。

ある会員は「子どもの問題も住宅の悩みも話ができて、希望が持てた。グループに入って自分の居場所を見つけた気がした」と言う。

津波で夫を失った女性と話すルパ・マネルさん(右から4人目) 2005年3月、スリランカ・コロンボ近郊のガンパ八県

数年からの新しい試みは保険制度づくりだ。会員は支店に開設した「健康口座」に医療保険料を払い込む。看護師が常駐する女性銀行診療所が少しずつ各地にできていて、会員家族が診察を受けると診療費が支店から補填(ほとん)される。生命保険や遺族年金のような仕組みも、会員たちが出資する基金によって運営されている。

援助機関の手で世界中に広がってきた貧困層への小口融資(マイクロクレジット)の中には、結果的に競争と格差拡大を押し進めている例も少なくない。だが、それらの例とは異なり、スリランカの女性銀行は、自前での共同の資金を生み出し、地域内で循環させることによって、人々の生活維持システムを築きつつある。その可能性に注目したい。

(毎週月曜日に掲載します)

スリランカの「女性銀行」

穂坂 光彦



【ほさかみつひこ】日本福祉大教授(居住福祉都市計画論)。1947年、東京生まれ。77年か国連職員としてアジア諸都市のスラムの改善に携わる傍ら、NGO「住まいの権利アジア連合(ACHR、本部バンコク)の設立・運営に参加。95年から現職。著書に「アジアの街わたしの住まい」(貧困と開発)(共編著)など。

自前の資金地域で循環

スリランカ最大の都市コロンボ。都心の大通りを一歩走ると目に入るのは、狭い長屋住宅の中庭で共同の蛇口に並ぶ女性たちだ。持てるだけのポリタンクを抱えて炊事の水を確保する。少し郊外へ行くと、線路わきや湿地に廃材を利用した住宅が立ち並び、法的には無権利だが、家族や友人が力を合わせて建てた住まいだ。こうした「スラム」の住民が、コロンボ市民の半数近くを占める。

一九八〇年代、スリランカの自由主義政権は、都市貧困層を政治的な支持基盤として「住まいの権利」を積極的に認め、土地や住宅融資を提供していた。しかしグローバル化の進む九〇年代になると、低所得者向けの住宅金融はほぼ解体し、外国資本が高級マンションを建設して投機的な販売を始めた。スラムの人々は、いつ追い立てられるかわからない不安の中で暮ら

り、マネルさんの土地も法的に一定の権利が認められ、それをきっかけに彼女は数人の仲間と互助グループをつくる。定期的に貯金し、必要があれば融資し、その試みを、彼女たちは周りの地区にも伝えていった。

九一年にマネルさんと仲

「ほさかみつひこ」日本福祉大教授(居住福祉都市計画論)。1947年、東京生まれ。77年か国連職員としてアジア諸都市のスラムの改善に携わる傍ら、NGO「住まいの権利アジア連合(ACHR、本部バンコク)の設立・運営に参加。95年から現職。著書に「アジアの街わたしの住まい」(貧困と開発)(共編著)など。

グループが地域ごとに連合して「支店」を名乗る。グループの資金は支店に集められ、グループへの融資として再配分される。

誰がいくら融資を受けるかの決定は、グループでの

女性たちは、グループ内でお互いを見守りながら、融資で子どもの学用品をそろえたり、高利貸からの借金の返済にあたり、大鍋を買って弁当をつくり路上で売って生計をたてたりしている。住宅融資もある。マネルさんも女性銀行の融資で少しずつ家を改修し、今は小さいながらもレンガ造りの二階家に住む。

女性銀行は、コロンボのスラムから全国へ拡大し、今では貧しい農村も含め会員は三万人を超す。二〇〇四年末のインド洋津波の直後には、被災者向け支援プログラムをつくった。会員になった被災漁村の女性たちは、避難先で応急住宅を建てたり、雑貨屋を開いたり、失った自転車と秤(はかり)を買戻して魚の行商を再開するなど、女性銀行の特別融資を通じて復興を進めている。

マネルさんたちは海外との経験交流も活発に行ってきた。「私たちのお金が外国のお金儲けに使われるのは困る。でも、どの国にも私たちと同じように苦しんでいる人はいらぬ。そういう人たちと、知恵や、緊急なばお金も、分かち合っていきたい」とマネルさんは話す。